



櫻田愛花さん

戦後77年

平和への誓い

今年度の能代市戦没者追悼式・平和祈念式典は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となりました。式典で発表される予定だった能代第一中学校3年の櫻田愛花さんの「平和への誓い」の作文を掲載します。平和の尊さを次の世代へ伝えていくため、皆さんも平和について考えてみませんか。 問合せ 福祉課 ☎89-2152

終

戦から77年を迎えました。私にとって戦争は歴史上の出来事ではありましたが、調べてみると現在も戦争の傷跡を抱え、苦しむ人々がいることを知りました。私たちの住む能代市は、大きな空襲を受けずに済みましたが、それでも戦争は人々の平和な日常を奪いました。

皆さんは、能代市に旧陸軍の「東雲飛行場」があったことを知っていますか。私は新聞でこの飛行場に関する記事を読みました。インターネットで詳しく調べてみると、訓練中の練習機が不時着し、7人の子どもが巻き込まれ、そのうちの4人が亡くなったといわれています。当時はその事故を口止めされ、遺族には補償もありませんでした。また、飛行場の事故で亡くなった人の葬式も禁じられることもあったそうです。関係のない子どもたちを巻き込んだ上に、軍事のために葬式もできないのはあまりにもひどすぎると感じます。私は能代で起こったそのような戦争の影響を受けました。

また、私はある本を読みました。広島、長崎に落とされた原爆による被爆者の方々の話です。本を開くと、生々しい写真が目に入り、私は思わず目を背けてしまいました。私たちは戦争を経験していませんので、苦しみを想像するしかありません。しかし、きつとその想像の何十倍もの苦しい思いがあったはずで、被爆者の方々は、目を背けたくなるような現実と向き合い、核兵器のない世界の実現を訴え続けながらこれまで生きてこられました。

世界では、現在、ウクライナの惨状が報道されています。昔、日本も経験した

生活が壊され、家族が引き裂かれ、人の夢が打ち砕かれるといった想像を絶する苦しい現実が、今、まさにそこでは起きているのです。

私が考える平和とは、みんなが当たり前前の生活を送ることができることです。「行つてきます」と言つて家を出て、「ただいま」と帰つてくることができる。「おはよう」と言い合える家族、友人がいる。今、私たちはそんな「当たり前」の中で生活しています。しかし、この「当たり前前の平和」は、苦しい戦争を戦い、「戦争のない世の中をつくろう」と必死に平和を求め続けてきた皆さんの人達の努力の結果なのだと思ってきました。そうだとすれば、これからの未来を担っていく私たちも、平和への道をどう歩むかを真剣に考えていかなくてはなりません。

未来を担う私たちができること。それは過去から学ぶことではないでしょうか。私にも戦争を経験した曾祖母がいますが、今となっては、詳しい話を聞くことが難しくなりました。今、戦争を体験し、語ることでできる人が限られてきています。インターネット、本、新聞、ニュースなどで知るしかありませんが、過去と向き合い、「戦争を経験した人達は、一体どんな思いでいるのだろう」「私たちにどんなことを伝えたいと思っているのだろう」など、機会を捉えながらそういう人達の思いに触れていきたいと思えます。戦争について考え、苦しんだ人々の痛みを想像し、自分の痛みとして感じられる優しさのある人になっていきたいです。みんながそうなったら、平和に繋がると思っています。

また、世界の動きに目を向けることも

大切だと歴史の授業でも学びました。今、ウクライナではとても悲しい状況になっています。この惨事を毎日のニュースで目にしますが、時間が経つにつれて慣れてきてしまっている自分がいます。自分事として捉え切れていない部分があったことは反省しなければなりません。しかし今回を機に、日本での過去の戦争を知ると、現実世界で起こっていることに恐怖を感じ、以前より近いものとして感じるようになりました。さらに世界では、戦争だけではなく、食糧の問題、環境の問題、貧困、感染症などさまざまな平和を揺るがす課題があります。私個人では解決することはできません。しかし、その課題について「自分はどう考えるか」という視点で向き合い、みんなが少しでも関心をもち、考え、行動することが解決への道だと思えます。

世の中には、いろいろな考えをもつ人がいます。当然私のクラスにもさまざま意見の人がいて、私もその中の一人です。自分の意見と違うからといってどれが正しいと決着をつけようとするのではなく、言葉で伝え合い、それぞれの考えの良さに気付きながら考えを深め合うことでよりよい考えにたどり着くと思えます。相手の気持ちや考えをわかってもらう心、認め合おうとするとも平和に繋がると思っています。

平和への道をどう歩むか、この課題に一人一人が向き合っていくことが、これまでの平和な世の中を築いてこられた人達のバトンを受け継ぎ、さらなる平和な社会をつくり上げることに結び付きます。私もそういう平和な未来を創造する一人になっていきたいです。